

超電話ボックス

季刊

電話ボックス 創刊号



2004年7月31日刊

発行人 中上哲夫 〒220-1103 神奈川県相模原市橋本4-11-10-408

淵上熊太郎 〒414-0002 静岡県伊東市湯川522-1

挿画 原哲弘

うなぎ

耳元で
ささやいてくる
時間も無視して
ボックスの存在も無視して
むき出しの電話として
明日会おうとか
気分が乗らないから
やめようかとか
意識不明のままに
約束をせまる

それでは
携帯電話とおなじ
ではないか
という
携帯電話とおなじ
ではないか
という
疑問もあるかもしれないが
超電話ボックスは
どこでも電話として
確実に存在している

携帯電話の通じない
海底でも
超電話ボックスは
耳をわしづかみにして
離さない

寝言でも電話をしてしまう私は
超電話と
ボックスの調和した空間で
ノイジーな暮らしぶり
ジージー言葉で表現する
悲しさも
所詮は
電磁波の乱れだ

その人の名前がトニーでも
格別に違和感は無かつた
白糸ロシアのハーフで
日本人の血をまったく感じさせない
顔立ちだったから
それなのに

カクテルの知識をひけらかすような客には
東京訛りのやや早口で
意地の悪いことを言つたりもする
カウンターの向こうの領地では
いかにもバーーンといった
恰幅のよい長身の

背筋を
やや反り気味なほどにピンと伸ばした
気持ちのいい立ち姿で
店の隅々まで目を行き届かせていた
ここで過去形の使用は
彼がすでに数年前に死んでいるからだ
店は姉のベティさんが続いているのかもしれないが
私はもう足が向かない
暇な時間にトニーさんと話していると
死ぬよりだいぶ以前の入院の時には
病院食がまずくてたまらなかつたといつて
糖尿の血筋で何度も入院をしていたようだ
退院して一番食べたのは何ですか」と聞くと
しみじみした様子で
「それはね
うなぎでしたね」と
やつぱり

東京の言葉でこたえたつけ

訪れる者といえば
ときどき頭上を旋回する禿鷹と
足元を這いまわる赤い舌の蜥蜴だけの
荒野のなかの電話ボックス

彼はずっと待っているのだ――

ある日

一台の車が電話ボックスの前にとまり
なからひとが降りてきて
ドアを開けると
受話器を取り上げ
穴にコインを落として
話し始めるのを

(おれだつたら
とからっぽの男はつぶやく
とつくの昔に消滅しているだろう
さもなくば近くの町まで歩いていつて
ひなびたバーのカウンターでぬるいビールを
のんでいるだろうな)



2004年7月31日刊

発行人 中上哲夫 〒220-1103 神奈川県相模原市橋本4-11-10-408

淵上熊太郎 〒414-0002 静岡県伊東市湯川522-1

挿画 原哲弘

WANTED

青白い顔と猫背と蟹股
そして
ぼさぼさ頭のふけふり撒きながら
新宿や渋谷の雑踏をふらふら歩いていた男
ボタンのとれたシャツ
と穴のあいた左右別々の靴下
映画館の看板やポスターをぼんやりながめいでいたり
百貨店のショーウィンドウに映った自分の影を見つめていた男
公園の公衆便所で顔を洗つて」いたり
うつろな顔でベンチにすわって
パンの耳をひきちぎって鳩に放つていた男
本屋の棚の間をぶらぶら歩いていたり
坂の途中の古本屋で文庫本に読み耽つていた男
図書館の閲覧室で居眠りしていたり
酒屋の店先で新聞を読みながらビールをのんでいたり
ジャズ喫茶の暗闇で夢遊病者のように体をゆすつていたり
レコード屋の前の歩道でアメリカのポピュラー音楽に耳を傾けていた男
百貨店の階段を屋上まで登つていて
降りてくると
ふたたび登つていった男
突然大声を発して走り出したり
横断歩道の真ん中で空を見上げていたり
倒産した銀行の石段で猫に話しかけていたり
ぶつぶつ意味不明の言葉をつぶやきながら信号が変わることじつと待つていた男
いつも香具師の輪のなかにいて
とりわけバナナの叩き売りが好きだった男